

7：今、日本のアートシーンに最も欠けているものは何だと思いますか？

アートを見るセンスや見識は、単に作品を理解するためのものではなく、その人自身の人生を豊かにする力だと思っています。そして、そうした感性を持つ人々が増えていくことで、社会そのものも、もっと成熟し、暮らしやすいものになっていくのではないのでしょうか。

この10年、私は台湾をはじめ様々な国を訪れてきました。そのたびに強く実感するのは、円の価値が相対的に落ち続けているという現実です。たとえば台湾に対しても、この10年で円の価値は40%近く目減りしました。40%というのは、皮膚感覚で言えば“半減してしまった”という感覚です。

もちろん経済には複雑な要因があります。しかし私は、その国の「美意識」や「文化への感受性」が、長い時間をかけて国の価値そのものに反映されていく側面もあると思っています。ARTを理解し、文化に投資し、価値を育てていく感覚。それは単なる趣味ではなく、社会全体の創造性や豊かさと深く結びついている。

だからこそ、この「アート」から「ART」へ、というプロジェクトは、単なる展覧会ではありません。これからの日本の未来や価値観を問い直していくための、小さくても重要な運動だと思っています。私はその覚悟を持って、この企画に取り組んでいます。

今の日本では、海外ではほとんど知られていない作家を「世界的アーティスト」と誇張して語ったり、本来批評性や歴史性を持つべき美術館が、話題性や消費性に流されてしまう場面も少なくありません。私は実際に、海外のコレクターやギャラリスト、批評家たちから、こうした美術館の企画を見られた上で、「日本のアートシーンは大丈夫なのか」と心配されることがあります。

けれど、本来日本人は、もっと繊細で、もっと深い美意識を持った民族だったはずで、私は決して、今の状況が日本の本来の文化水準だとは思っていません。

だからこそ、今こそ立ち上がる時なのだと思います。

失われかけている美意識や文化への感受性を、もう一度世界と接続し直していく。その挑戦を、ここから始めたいと思っています。